

《研究論文》私立大学における校歌制定とその意義について

―高野辰之と専修大学を中心に―

瀬戸口 龍一
(大学史資料課)

はじめに

高野辰之は、東日本大震災発生以降、最も多く歌われたと言われる「故郷」のほか、「朧月夜」「春の小川」「紅葉」など、今なお多くの人々の心をひきつけてやまない唱歌や、全国一〇〇校を超す校歌の歌詞を手掛けた人物である。しかし彼の功績はそれだけではない。文学・演劇・邦楽など日本文化の研究者としても大きな足跡を残している。

昨年一二月一日から一六日にかけて、石巻市と石巻専修大学および専修大学は宮城県仙台市において「唱歌斉唱・「故郷」の作詞者・高野辰之の生涯」と題した展示を開催（口絵参照）した。その目的は、東日本大震災発生以降、様々な形で復興活動に取り組んできた石巻市・石巻専修大学・専修大学が、震災によって甚大な被害を受けた東北地域の方々に、高野が後世に伝えようとした「日本の国土の美しさ」や「日本の文化」を、本展示を通して紹介するこ

とにあった。

なぜ、専修大学が高野辰之の展示を行うのか疑問を持つ方もいるだろう。実は高野は大正一五年（一九二六）に制定された専修大学校歌の作詞者であり、石巻専修大学も同じく専修大学の校歌を引き継いでいるからである。また高野の義理の子息である正巳は専修大学の教員でもあった。その縁から今回、高野辰之展を開催したわけであるが、展示に当たっては高野辰之のご子孫でもあり、東京工業大学名誉教授である芳賀綾氏、現在の高野家ご当主である高野良之氏、そして長野県にある高野辰之を顕彰する記念館「高野辰之記念館」（中野市）「おぼろ月夜の館・斑山文庫」（下高井郡野沢温泉村）、渋谷区に暮らした文学者の一人として高野を紹介している「白根記念渋谷区郷土博物館・文学館」の各担当者など、数多くの方々に大変お世話になった。この場を借りてお礼申し上げる次第である。

専修大学大学史資料課は、こうした方々の協力を得て、高野に関する文献・資料調査を行ったが、本稿はその成果の一つである。

高野辰之に関する先行研究は非常に多い¹⁾。伝記に類するものも何種類も刊行されている。高野が「故郷」や「朧月夜」などの唱歌の作詞者と認められたのは昭和四九年（一九七四）。わずか約四〇年前のことであるが、「故郷」の作詞家・高野辰之というイメージは今や多くの人々に受け入れられたと言って良いだろう。高野辰之記念館やおぼろ月夜の館の両館も「故郷」の唱歌作家としての高野辰之を前面に押し出している。

さらに近年では、明治期における文部省唱歌の成立過程やその意義に着目する岩井正浩氏²⁾や鈴木治氏³⁾をはじめ、音楽史や教育史の観点からも研究が進められているほか、唱歌作家としての高野の仕事以外に注目する研究もなされるようになった。国文学者として数多くの古典籍を収集・研究していた高野の業績を取り上げた武井和人氏⁴⁾の研究、高野の邦楽研究や邦楽教育に着目した権藤敦子氏⁵⁾の研究などもある。

そのほか本稿に関わる校歌作家としての高野については、長野県において校歌がいつ頃どのように作られていったのかを分析した市川包雄氏の研究⁶⁾がある。また村制施行四〇周年を記念して編纂された『高野辰之作詞全国校歌集』（長野県豊田村 一九九六）には高野が作詞した校歌のうち七〇曲の歌詞が収録されている。現在では、その後判明した高野作詞の校歌を加えて一覧にしたものを

「高野辰之作詞一覧表」として、高野辰之記念館のホームページ上で紹介している。本稿の執筆に当たって参考にさせていただいた。

本稿では、こうした先行研究を踏まえつつ、明治末期から昭和初期にかけて次々と作られた校歌がどのような経緯で、何のために作られたのかという問題を、高野辰之が作詞した専修大学校歌の制作過程を分析することで明らかにする。この作業を通して、私立大学にとっては校歌は何のために必要だったのかという問題を探りたいと考えている。

1. 高野辰之略歴

まずは高野辰之の略歴から紹介することとする。長野県下水内郡永田村大字永江（現・中野市）という長野県北部の、冬は一面雪に覆われる山村で高野は生まれた。父の名前は仲右衛門、母の名前はいし。明治九年（一八七六）四月一三日のことであった。

高野の幼・少年期における人間形成や学問への芽生えには、故郷の自然とともに、父・仲右衛門の影響も大きかったと言われている。嘉永三年（一八五〇）に生まれた仲右衛門は、農業のかたわら、隣村・小布施の豪商であり、陽明学者としても高名であった高井鴻山（一八〇六・一八八三）のもとで学問を修めるなど優れた教養を持った人物であった。

こうした父に育てられた高野は、地元の永江学校、下水内高等小学校を経て、わずか一四歳（以後、高野の年齢はすべて満年齢）で

母校・永田尋常小学校（永江学校の後身）の代用教員となる。しかし学問への情熱を捨てられず、当時県下随一の長野県尋常師範学校（現・信州大学教育学部）に進学。ここで多くの学友と出会い、学業に邁進する。

高野が本格的に国語国文学の研究を始めるようになったのは師範学校卒業後、単身上京して、東京帝国大学（現・東京大学）の教授であった上田萬年^{かずとし}に師事してからのことであった。

上田萬年（一八六七・一九三七）は、明治・大正期を代表する国語学者として、東京帝国大学国語研究室の初代主任教授や文科大学長、文学部長も務めた人物である。高野が唱歌の作詞に携わるようになったのは、明治四二年に上田の推挙によって文部省小学校唱歌教科書編纂委員に嘱託されてからであった。大正六年（一九一七）にこの職を解かれるまでに、「故郷」のほか「日の丸の旗」「紅葉」「春が来た」「春の小川」「朧月夜」という、大正年間以降、日本国中で愛唱された名曲を世に残した。

ちなみに唱歌とはもともと、明治政府が学校教育のために定めた教科の一つであるが、文部省に導入を提唱したのは現在の東京藝術大学の設立に深く関わった伊沢修二と専修大学の創立者の一人である目賀田種太郎の二人。彼らがアメリカ留学中に音楽教育の重要性を知り、日本に導入を図ったのである。

唱歌作詞者としての側面が強調されがちな高野ではあるが、彼はその生涯を国語国文学研究に捧げた人物であった。特に当時、「俗

文学」と軽視されていた近松門左衛門や井原西鶴に代表される江戸時代の文学や、歌謡や演劇といった当時誰も顧みなかった分野に光を当て、日本文化の再発見に努めている。

大正一四年には東京帝国大学から提出済みの論文「日本歌謡史」に対して、満場一致の推薦で博士号を授与される。そして昭和三年（一九二八）には天皇后両陛下にご進講を行うという栄誉を得ていることから、高野の学問的業績がいかに認められていたかを知ることができるだろう。そしてその成果は今でも『日本歌謡史』『江戸文学史』『日本演劇史』といった膨大な著作物を通して知ることができる。

さらに高野は教育者としても大きな業績を残している。一四歳で母校に代用教員として勤務して以来、五九歳で東京音楽学校（現・東京藝術大学）教授および東京帝国大学講師を辞任。その後六六歳で大正大学を辞任するまで、多くの学校で教壇に立ち、後進を育成してきた。

その授業は多くの学生を惹きつけ、時には教室から学生があふれ出るほど人が集まったと言われている。辰之の教えを受け、研究者として大成した人物も数多い。また邦楽教育の必要性を説き、東京音楽学校に邦楽科を創設したのも高野の仕事であった。

晩年は故郷である永田村に近い、長野県下高井郡野沢温泉村に建てた別荘「対雲山荘」に隠棲。この地で息を引き取った。享年七〇歳であった。

2. 校歌とは何か

ここからは本稿の主題である校歌について述べよう。校歌とは、広辞苑によると「学校で、建学の理念をうたい、校風を発揚するために制定した歌」⁷とある。日本初の校歌は明治十一年（一八七八）一〇月に制定された東京女子師範学校（現・お茶の水女子大学）校歌「みがかずば」と言われている。この校歌は明治八年二月、同校開校に当たって時の皇后（後の昭憲皇太后）から下賜された御製歌に曲を付けたものである。

続いて華族女学院（現・学習院女子大学）が同じく皇后から下賜された御製歌「金剛石」に曲を付けて校歌とした。明治二〇年のことである。両曲ともにその歌詞は忠孝を中心とした修身的内容となっており、「金剛石」は後に小学校の国語や修身の教科書に取り上げられたほどである。その意味では明治初期の校歌の特徴をよく表していると言っても良いだろう。

明治二十六年、文部省は「祝日大祭歌詞並楽譜」を告示する。その二年前の明治二十四年に小学校で祝祭日を祝う儀式を執り行うよう指示したことを受けてのことであった。つまり、この儀式の際に使用する歌を定めたのが「祝日大祭歌詞並楽譜」であった。入卒業式において今なお続く「君が代」斉唱はこの時に始まったのであるが、これが小学校において校歌を制定するきっかけになったと言われている。少なくとも小学校において、校歌は儀式用の歌として出発したということが言えよう。

東京都台東区立忍岡小学校の旧校歌は明治二十六年に制定されており、現存する小学校の校歌としては最も古いものと言われているが、これ以降、全国の小学校や中学校で校歌が制定されていた。当時、こうした公立の小学校や中学校の校歌の制定の有無は、その学校の長に任せられていたが、儀式で歌う際の歌の歌詞や曲には認可が必要であった。明治二十四年に出された「文部省訓令第二号」には次のようにある。

北海道庁 府県

一 小学校ニ於テ祝日大祭日ノ儀式ヲ行フノ際、唱歌用ニ供スル歌詞及楽譜ハ特ニ其採択ヲ慎ムヘキモノナルヲ以テ、北海道庁長官府県知事ニ於テ予メ本大臣ノ認可ヲ経ヘシ、但文部省ノ撰定ニ係ルモノ及他ノ地方長官ニ於テ一旦本大臣ノ認可ヲ経タルモノハ此限ニ在ラス

一 前項唱歌用ノ歌詞及楽譜ハ漸次文部省ニ於テ撰定頒布スヘシ

このように、儀式で歌うための校歌を制定しようとする学校は、まず校歌の歌詞と楽譜をその地域の知事を通して文部省に提出しなければならなかった。その後、文部省の認可を経て、正式に学校校歌として制定されるのである。

ちなみにこの訓令には「説明」として次のように記されている。

唱歌ノ人心ヲ感動スル力ノ大ナルハ普ク人ノ知ル所ナリ、故ニ之ヲ教育上ニ適応センニハ、須ラク其歌詞楽譜ノ雅正ニシテ心情ヲ快活純美ナラシムルモノヲ採択スヘシ、殊ニ小学校ニ於テ祝日大祭日ノ儀式ヲ行フニ当リ用フル所ノ歌詞楽譜ハ、主トシテ尊王愛国ノ志氣ヲ振起スルニ足ルヘキモノ、所謂国歌ノ如キモノタラサルヘカラサルハ論ヲ俟タス、然ルニ未タ適当ノ歌詞楽譜ナキカ為メ往々杜撰ノモノヲ用フルモノアリ、是レ教育上深ク憂フヘキコトナルヲ以テ本令ヲ発シタルナリ

当時、文部省がどのような意図を持って、小学校の祝日大祭日に唱歌を歌わせようとしていたかをよく示す文章である。「尊王愛国ノ志氣ヲ振起」がその主たる目的であった。文部省は、歌に人心を動かすことができる力があるということを知ったうえで、教育に利用しようとしていた。だからこそ歌詞や曲調を検定する必要があったというわけである。

先に校歌は「学校で、建学の理念をうたい、校風を発揚するために制定した歌」と定義されていると述べたが、「建学の理念」や「校風を発揚するため」の歌詞には、学校の管理者である文部省の意志が少なからず入っていたことを意味している。

そのことを示す例を挙げよう。水崎富美氏によると、東京都公文書館が所蔵する公立小学校校歌に関する往復書簡を分析すると、歌詞と楽譜に対する文部省の手による訂正を数多く見ることができ

という。その事例は高野が作った校歌にも見ることができる。

昭和一七年（一九四二）、高野と作曲家・信時潔の二人は、雨宮県国民学校（現・千曲市立東小学校）の校歌を依頼され、完成させた。学校側はすぐに長野県知事に宛てて認可申請を提出したが、不認可という通達が来た。その理由は高野が書いた歌詞にあったのである。高野は歌詞を修正して再度、提出したが、この歌詞にも物言いがつき、結局、この校歌はお蔵入りになった。

このことは、こうした事例は東京都だけでなく全国的にあったことを示すとともに、文部省がいかに小学校の校歌制定に介入していたかを表している。校歌も文部省が提唱する教育方針に従うことが求められていたのである。

ここで指摘しておきたいのは、先に挙げた二つの女子大校歌は別として、校歌は儀式歌として始まったこと、そして小学校を含めた公立学校の校歌の制定には文部省の認可が必要であったことの二点である。では本稿で問題とする大学、特に私立大学ではどうだったであろうか。

3. 大学校歌の隆盛

最も有名な大学校歌は何かという問いには、多く人々が早稲田大学の校歌「都の西北」と答えるのではないだろうか。校歌と言えば普通は入学式や卒業式で歌うものであるが、当然こうした儀式の中で歌われるだけならば、その学校の教職員や在学生および保護者の

みが聞くだけで、一般の人には全く縁がないということになる。

ではなぜ早稲田大学関係者以外で早稲田の校歌を知っている人がいるのか。その理由としてはいくつかあると思われるが、その一つに東京六大学野球を筆頭とした大学スポーツの存在がある。甲子園球場で開催される全国高校野球選手権において流れる校歌を一般の人々が覚えるように、神宮球場で流れる早稲田の校歌が広く浸透していったのであろう。

今では高校生にそのお株を奪われてしまった感があるが、明治期から戦前にかけて学生スポーツの主役は、大学生であった。なかでも盛んに行われていたのが東京六大学野球に代表される学校対抗戦である。大学校歌の隆盛にはこの大学スポーツの隆盛と深い関わりがあるのである。

そのため本稿では大学校歌の中に応援歌も含めて考察する。なぜならば大学または旧制高校においては、校歌よりも応援歌の方が先に作られた例を多く見ることができからである。そこに小学校や中学校校歌とは違う、大学や旧制高校など高等教育機関が制定した校歌の特徴があると考えている。

校歌には、その学校に通う生徒に郷土愛を形成させる、またはその学校の教育方針を確認させるための歌詞が盛り込まれている。というよりそこに校歌の意義があった。特に小学校や中学校ではその傾向が強い。もちろん旧制高校や大学の校歌もそうした役割を果たす訳であるが、もう一つ、大事な役割がある。それは自校の存在を

その学校関係者以外の人々にアピールするものである。

そうした大学校歌の特徴を早稲田大学校歌から見よう。東忠尚氏によると「本格的な大学の校歌であり、百年近い校歌の歴史のなかで、今のところ決定版といってよい存在」¹⁰と、非常に高い評価が与えられているのが早稲田大学の校歌であるが、なぜだろうか。その理由を探ってみることにする。

二〇〇七年一〇月、早稲田大学大学史資料センターは校歌制定一〇〇年を記念して「校歌誕生」と題した展示を行っているが、早稲田大学が、学校創立三五周年を記念して校歌を制定したのは、明治四〇年（一九〇七）のことである。それに先立つ明治三十九年九月一四日付の読売新聞には次のような広告が掲載された。

早稲田大学校歌募集

同大学にては今回懸賞法により広く二様の校歌を募集する由、一は莊重、典雅、壮快、雄大などいふ語の何れかを以て形容し得べき声調なるを要し、他は取材の範圍一層広く早稲田に於る学窓生活の苦楽若しくは人世に於る青年時代、学生時代に関する愛惜歡喜等の情を述ぶるも不可なしと

まずは早稲田大学が二種類の校歌を募集していることに着目したい。早稲田大学は当初より「莊重、典雅」な校歌と、もっとわかりやすい親しみやすい校歌とを分けて制定しようとしていたのであ

る。おそらく前者は儀式で使用、後者は応援などに使用しようとしたものと思われる。後者の考え方はそれ以前に校歌を制定している東京女子師範学校や華族女学院には見られないものである。

残念ながらこの募集に関しては、大学側が望むような作品が集まらず、作詞を卒業生の相馬御風、作曲を雅楽家の東儀鉄笛に依頼してできなかったのが現在も歌い継がれる早稲田大学校歌（別名「都の西北」）である。

一、都の西北 早稲田の森に

聳ゆる薨は われらが母校

われらが日ごろの 抱負を知るや

進取の精神 学の独立

現世を忘れぬ 久遠の理想

かがやくわれらが 行手を見よや

わせだ わせだ わせだ わせだ

わせだ わせだ わせだ

二、東西古今の 文化のうしほ

一つに渦巻く 大島国の

大なる使命を 担ひて立てる

われらが行手は 窮り知らず

やがても久遠の 理想の影は

あまねく天下に 輝き布かん

わせだ わせだ わせだ わせだ

わせだ わせだ わせだ

三、あれ見よかしこの 常磐の森は

心のふるさと われらが母校

集り散じて 人は変れど

仰ぐは同じき 理想の光

いざ声そろへて 空もとどろに

われらが母校の 名をばたたへん

わせだ わせだ わせだ わせだ

わせだ わせだ わせだ

創立二五周年祝典に合わせて制定された、この校歌が初めて披露されたのは、祝典の際であった。この時の校歌制定において中心的役割を担ったのが、当時、文学科教員を務めていた坪内逍遙と島村抱月の二人である。

校歌の作詞者・相馬御風の回顧録には、相馬と東儀は校歌作成に当たって、イギリスやアメリカなどの大学校歌を参考としたこと。

歌詞については坪内逍遙が完成後に手を入れ、修正をしていること。そしてこの校歌の評価を高める一つの要因にもなった「わせだ わせだ わせだ」という繰り返しのフレーズは坪内逍遙の発案であったことが記されているという¹¹⁾。

早稲田大学校歌の歌詞には、①学校の所在地（「都の西北 早稲

各大学の校歌（応援歌・寮歌など）制定年

大学名	制定年	歌詞の冒頭	作詞	作曲	備考
慶応義塾大学	明治37年	天にあふるる文明の 潮東瀛によする時	角田勤一郎	金須嘉之進	旧塾歌
	昭和15年	見よ風に鳴るわが旗を	富田正文	信時潔	現行塾歌
立教大学	明治40年	仰げば上に日星あり 俯すれば下に山河あり	本莊季彦カ		旧校歌
	大正15年	芙蓉の高嶺を雲井に望み	諸星寅一	島崎赤太郎 (編曲・辻莊一)	現行校歌
早稲田大学	明治40年	都の西北早稲田の森に	相馬御風	東儀鉄笛	現行校歌
駒沢大学	明治41年	老木の梅の初花に	大内青巒		旧校歌
	昭和5年	新人立てり 立てり 竹は波うつ	北原白秋	山田耕筈	現行校歌
明治大学	明治44年	とよさか昇る 朝日子に	田能村梅士・藤沢衛彦		旧校歌
	大正9年	白雲なびく駿河台	兄玉花外	山田耕筈	現行校歌
日本大学	大正9年	うららに明るく朝ぼらけ	大森洪太	立松久子	旧校歌
	昭和4年	日に日に新たに 文化の華の	相馬御風	山田耕筈	現行校歌
法政大学	大正12年	お濠に影うつして いや妙にも花咲く	為光直経	瀬戸口藤吉	旧校歌 現・行進曲
	昭和6年	若きわれらが命のかぎり	佐藤春夫	近衛秀麿	現行校歌
東洋大学	大正13年	亜細亜の魂再び此処に	林古溪	山田耕筈	現行校歌
専修大学	大正15年	宮城の北 枢地に立ちて	高野辰之	信時潔	現行校歌
一橋大学	昭和2年	空たかく光みなざり 照り映えてさゆらく公孫樹	酒井敬三郎	山田耕筈	旧校歌
	昭和25年	武蔵野深き松風に 世の塵をとどめぬところ	銀杏会同人	山田耕筈	現行校歌
東京大学	明治35年	嗚呼玉杯に花うけて	矢野勤治	楠正一	第一二回記念祭東寮寮歌
	昭和7年	大空と澄みわたる淡青	北原白秋	山田耕筈	運動会歌
	昭和22年	ただ一つ 旗かげ高し	大森幸男	山口琢磨	応援歌

※各大学のHPなどをもとに作成

※校歌などが複数ある場合は最初に作成されたものと現行の制定年などを併記した

※東京大学は運動会歌と応援歌を「東京大学の歌」と位置づけている

田の森に」)、②建学の精神(「進取の精神 学の独立」)、③学校名(「わせた わせた わせた わせた わせた わせた わせた」)、という三つの要素が組み込まれている。今となっては当たり前と思われるかも知れないが、修身的教えを説く東京女子師範学校や華族女学院の校歌とは全く違うスタイルを採っている。早稲田大学校歌がその後の私立大学校歌のスタイルを形作ったと言っても良い。「決定版」と言われる所以である。

もう一曲、早稲田大学校歌とともに日本三大校歌の一つと称される明治大学校歌を取り上げる。ちなみに三大校歌のもう一つは法政大学校歌である。

明治大学校歌の制定も早稲田と同様、もしくはそれよりも紆余曲折の末のことであった。この制定までの経緯については『明治大学百年史 第三巻 通史編Ⅰ』(明治大学 一九九二)に詳しく書かれているが、そもそも最初に明治大学において校歌募集が行われたのは早稲田大学が校歌を制定した年である明治四〇年。学内・学外を問わず誰でも応募することができた。しかし早稲田大学と同様に良い応募作品がなく、結局、選考に関わっていた卒業生の田能村梅士と在学生の藤沢衛彦の手によって作成された。これが明治大学最初の校歌である。

残念ながらこの校歌はあまり評判が芳しくなかったようで、その後も大学当局はたびたび校歌のための歌詞を募集した。そのような状況のなかで、学生が主導となって大正九年(一九二〇)に校歌の

作成が始まる。学生たちが校歌を欲した理由は、隅田川で開催され、当時絶大な人気を誇っていた大学対抗ボートレースの応援のために歌が必要となったからであった。

学生たちは学校当局に熱心に掛け合い、作詞家である児玉花外と作曲家である山田耕筰に校歌を依頼した。作詞に関しては山田の意見を取り入れ、完成後に何人かの人々によって手が入られたが、こうしてできあがったのが、「白雲なびく駿河台 眉秀でたる若人」¹¹という歌詞で始まる現在の明治大学校歌である。

当然、この明治大学校歌にも先に挙げた、①学校の所在地（「白雲なびく駿河台」）、②建学の精神（「権利自由」）、③学校名（明治その名ぞ吾等が母校」）、の三つの要素が歌詞に組み込まれている。

そして明治大学の校歌制定を考える際に最も重要となるのが、大学対抗戦の応援に必要であるという理由である。さらに学生主導のもと校歌作成が行われたという点にも着目したい。なぜならば、同様の理由で校歌制定を行った私立大学も非常に多いからである。

明治期の半ば頃から昭和初期にかけて、様々な競技の対抗戦が始まる。特に明治末期になると、旧制高校間の対抗戦よりも大学間の対抗戦が盛んに行われるようになり、それに伴い対抗戦に多数の観客が集まり、人気を博していく。大学スポーツの観戦が一般の人々にとっても大きな娯楽の一つになっていくのである。なかでもボートと野球の対抗戦はその双璧とも言えよう。明治大学がボートレース対抗戦のために校歌を制定した理由はそこにある。

もう一つの花形スポーツであった東京六大学野球の前身である早慶戦が始まったのは明治三六年。その後、明治・法政・立教の各大学が順次加わり、最後に東京帝国大学（現・東京大学）が参加し、現在の東京六大学野球連盟が発足したのが大正一四年のことである。法政大学や立教大学はこの東京六大学野球の応援のために校歌を制定したと言われているほどである。いかに大学スポーツが校歌制定に深い関わり持っていたがわかるだろう。

学生たちにとって野球やボートをはじめとした大学対抗戦は応援合戦の場であった。観客が一九丸となって規律的に応援を行うためにも応援歌は必要であった。明治大学に至っては、校歌制定以前の応援は「怒号の如き叫び」のような状況であったという¹²。これが学生側が校歌もしくは応援歌を必要とした理由である。

当然のことながら大学当局側にもこうした場で校歌や応援歌を歌う理由がある。大正七年に後述する「大学令」が公布される。私立学校や公立専門学校などが次々と「大学」へと改称するなか、進学率も高まり、高等教育機関へ進む者が増えた。つまり、各大学も積極的に宣伝活動を行い、学生を確保する必要があるためである。今も昔も大学の主要な収入源は、学生から徴収する入学金と授業料であることは変わらない。

大学スポーツが広く一般の人々に浸透し、実際に観戦に足を運ぶ者やラジオ中継を聴取する者が増えたこの機会を学校側として絶好の宣伝機会と捉えたとしても不思議はないだろう。そこで校歌を流

し、学校の存在を広くアピールすることが大学にとっても大きな意味を持つてくるのである。私立学校であればなおさらである。ここに私立大学が校歌を制定する意義と、小学校や中学校が校歌を制定する意義の大きな違いを見ることが出来る。こうした状況を踏まえ、専修大学を見ていくことにしよう。

4. 専修大学校歌制定までの経緯

専修大学校歌が制定されたのは大正一五年（一九二六）一月のことである。専修大学が毎年、文部省に提出していたと思われる報告書が学内に残されているが、大正一五年五月に作成した報告書¹³には「校歌制定の件」として次のように書かれている。

一、多年ノ懸案タル校歌ノ制定ニ関シ、大正十四年九月中作歌ヲ文学博士高野辰之君二、作曲ヲ東京音楽学校教授信時潔君二依頼シ、十五年一月中儀式歌及応援歌共全部ノ作成ヲ告ケ、学生一般ニ之ヲ頒布セリ

これによると大正一四年九月に高野辰之に作詞を、信時潔に作曲を依頼。翌一五年に完成し、学生に公布したとある。

しかし、それまで専修大学に校歌のようなものがまったくなかったわけではない。『専修大学々報 第一巻第一号』（大正九年一〇月発行）には「応援歌」が掲載されている。次のような歌詞である。

千代田の城に程近き 名高き専修大学に
学ぶ数千の健児等の 溢る、意気を君見ずや
夫れ帝国の隆替は かゝりて吾等の肩にあり
自彊不屈の戈とりて 国富の増進はかるべし
振へ専修健男児 行路を阻む者あらば
鎧袖一触粉碎し 専修の本領表はさん

作者は「経二 仲村文治作」とあり、当時、経済学部二年生で、大正一一年に専修大学同学部を卒業した仲村文治が作詞。残念ながら楽譜が掲載されていないため、曲調はわからないが末尾に「アムール河の節」とあることから、ロシア民謡の「アムール河のさざ波」の旋律と同じものと思われる。

「アムール河のさざ波」は日露戦争（一九〇四―一九〇五）の最中に作られた歌で、日本でも戦後は合唱曲としてよく歌われていた。しかし明治三四年（一九〇一）に作られた第一高等学校（現・東京大学）の「第一一回記念祭東寮寮歌」の別名も「アムール川の流血や」であり、この旋律を採ったとも考えられるが、いづれにせよ定かではない。

では、この応援歌はどのような場面で歌われていたのだろうか。同じく『専修大学々報 第一巻第一号』には当時、専修大学で一番大きな問題となっていた「大学昇格運動」に関する記事が載せられている。そこに「第一回 昇格大会」の様子が記されているが、

「堂々」たる開会宣言の後、「やがて会衆は応援歌を合奏して学生演説に入るや各級弁士は交々立ちて」とある。

この記事から応援歌が、会場にいる学生たちを高揚化・一体化させることに一役買っていたことがわかる。その一方で応援歌が「やがて会衆は応援歌を合奏」とあるように、全員が揃って決まったプログラムの一環として歌うことが決まっていなかったこと、つまり学校や学生にとって正式な儀式歌として定まっていなかったのではなかったことも示している。

こうした状況のなか、他大学に負けじと専修大学でも校歌を作ろうという動きが始まるのは先に挙げた報告書にあったような大正一四年ではなく、大正一三年のことである。『専修大学学生会報 第七号』（大正一三年九月二五日）には次のような記事が掲載されている。

校歌を懸賞募集 学生の中から

校歌の必要である事はとくに在学生が認めて、従来何回か学校に諮つて居たのであるが、昨年の大震災、其他事件がそれからそれへと起きたために遂今日迄実現するの運びになつて居なかつた、然るに今回学生会で学校当局に向つて校歌の作成を諮つた処、当局も之に賛意を表したので、本学々生中から懸賞募集し、作曲の方は一流の専門家に依頼する事になつたといふから、在学生諸君は奮つて応募せられたいとの事である、因に懸賞金は左の通りで、届先は学校事務所であると

一等 金二十円

二等 金十円

三等 金五円

×切は十月三十日

この記事からもわかるように専修大学校歌制定の動きはまず学生側から起こった。このたび重なる学生の要望を大学当局も受け入れて、校歌の作詞を在学生に募集することにしたのである。作詞は学生から募集するが、作曲は当初から「一流の専門家に依頼」するところが決まっていたことも着目すべき点だろう。

一等賞金の二〇円であるが、大正一五年当時、公務員の初任給が七五円¹⁴。また大正一四年四月に改正された「専修大学学則」を見ると、専修大学の学費は一年間で八八円であった。二〇円のおおよその価値が知ることができるだろう。

さらに同会報には、次のような広告が掲載されている。

校歌懸賞募集

定規募応

- 一、本学の校風及学生の意氣を表したものなること
- 一、本学は東京市神田区今川小路にあることを云ひ現すべき文句あること
- 一、活発勇壮なものなること
- 一、応募者は本学々生たること

一、締切期日十月三十日

賞金

一等 金二十円 一人

二等 金十円 二人

三等 金五円 三人

大正十三年九月二十四日

専修大学

同学生会

ここでは大学当局と学生が校歌にどのような歌詞を求めていたかを知ることができる。校風や大学の所在地を組み込むことが明確に謳われているのである。

先に挙げた早稲田大学には「莊重、典雅、壮快、雄大」という言葉を組み込むようにとあったが、専修大学では「活発勇壮」にするようにとの指示が出されている。このことはこの時点での校歌のイメージを儀式で使うような莊嚴なものではなく、もっと元気なものを想定していることも示している。

こうして専修大学も学生から作詞を募集したわけであるが、早稲田大学や明治大学と同様にあまり良い作品が集まらなかったのか、結果的には当時、東京音楽学校（現・東京藝術大学）教授で文学博士でもあった高野辰之に白羽の矢を立てることとなった。

とはいえ、私立大学としては校歌の歌詞を作成する際には、応募

という形でまずは大学関係者から求めることが一般的であったことがわかる。その理由として明治末期から大正期にかけて、学内にも大正デモクラシー的雰囲気蔓延し、学生たちが自ら学生会を結成するなど、何事にも自主性や自立性を主張していくという時代的風潮が挙げられるだろう。

5. 専修大学校歌と高野辰之

高野は大正初期から昭和期にかけて、北海道から九州、さらには当時、日本の統治下にあった満州や台湾などの小・中・高校・大学の校歌を作詞した。その数は一〇〇校を超える。作詞した校歌の一つ一つに各学校の理想や建学の精神を織り込みながら青少年教育への願いを込めたと言われる高野の校歌は、今なお多くの学校で歌い継がれている。

専修大学がなぜ高野に校歌を依頼したのか、その理由はよくわかっていない。これまで刊行されてきた高野の伝記などを見ると、前述したように当時の校歌は、文部省による認可制であったため、文部省唱歌や文部省国語教科書の編纂委員を務めた高野が作詞した校歌ならば、文部省にも顔が利き、認可も下りやすいためではなかったのかという推測がなされているものもある。また高野が持つ東京音楽学校教授という肩書きも文部省からの認可に一役買ったのではないとも言われている。

確かに校歌の作詞者や作曲者には東京音楽学校の関係者が多い。

高野辰之をはじめ、後述する専修大学校歌の作曲家である信時潔、高野と組んで、「朧月夜」「故郷」「春の小川」などの数多くの唱歌を作曲した岡野貞一も数多くの校歌を手掛けている。また成蹊高等学校（現・成蹊大学）や神奈川県立農業学校（現・神奈川県立平塚農業高等学校）のように校歌の作成を東京音楽学校に直接、依頼した例も多い。このように戦前までの校歌の作成に東京音楽学校が深く関わっていたことは間違いない。

明治十二年（一八七九）、伊沢修二と目賀田種太郎が文部省に提出した音楽教育に関する意見書を取り入れる形で設立された音楽取調所を前身として、明治二〇年に東京音楽学校が創立される。音楽家の養成はもちろんであるが、何より教員の養成を含めた日本における音楽教育の推進が主たる目的であった。当然、設立当初から文部省と深い関わりを持ち、文部省が提唱する教育方針を連動して推し進めてきた学校の一つでもある。高野の名前を挙げるまでもなく、唱歌教育にも深く関与してきた。その意味では校歌作詞者として高野が適任であるという推測もあながち否定できない。

では、私立大学の校歌の校歌制定に文部省の許可が必要であったのだろうか。実は必要ない。それならば文部省に受けの良いと思われる高野に依頼する意味はないと思われるが、大正七年（一九一八）以降、私立大学も文部省の意向が大きく反映されるようになる。「大学令」の制定である。

第一条 大学ハ国家ニ須要ナル學術ノ理論及応用ヲ教授シ、並其ノ蘊奥ヲ攻究スルヲ以テ目的トシ、兼テ人格ノ陶冶及国家思想ノ涵養ニ留意スヘキモノトス

「大学令」は、私立学校にも法制度上、帝国大学と同じ「大学」への道を切り開いたと同時に、私立学校がこれまで持っていた自主性や個性は弱められ、政府の枠組みの中に取り込まれるという結果を招いた。大学は、「国家ニ須要ナル學術ノ理論及応用ヲ教授」するだけでなく、「人格ノ陶冶及国家思想ノ涵養ニ留意スヘキ」とあるように、私立大学も国家が考える高等教育方針を受け入れざるを得なくなり、国家の監視下に置かれることになったのである。

学生からの突き上げや、財政的な問題をクリアし、ようやく専修大学が念願でもあった「大学令」による大学へと昇格したのは、校歌を制定するわずか四年前の大正十一年のことであった。専修大学が文部省の意向を気にしていたとしてもおかしくない時期である。その意味では高野と信時という東京音楽学校教授に作詞・作曲を依頼したとしても何ら不思議ではなかった。

もう一点高野と専修大学の繋がりとして取り上げられるのが、昭和五年（一九三〇）一月に高野の養女・弘子に婿入りし、義理の子息となった高野正巳の存在である。正巳が専修大学の教壇に立っていたのは昭和五年から一九九年にかけてのことで、国語や漢文を担当していた訳であるが、この正巳が高野と専修大学を結びつけたとも

言われている。というのも、これまでも高野は校歌の作詞依頼を血縁者を通して受けているからである。

例えば、昭和五年に校歌を制定した相馬市立飯豊小学校の場合は、福島県出身の正巳の兄である荒井俊一がこの学校に勤務していたことが縁となって、高野に作詞を依頼したという。また後述する飯山高等女学校（現・長野県飯山高等学校）の校歌作成もそのいきさつも畑守氏によると次のような話である。同校の校歌は昭和三年に昭和天皇即位の大礼を記念して計画された。高野に白羽の矢が立った理由は、高野の弟である資紀夫人くにと飯山高等女学校に在職していた清野ひゃくが姉妹関係だったことによるもので、くにから高野に作詞が依頼された。その依頼を受けて高野が同校に歌詞を届けたのは昭和四年一月一四日のことであつた¹⁵。

これらの例から考えて専修大学が校歌の作詞を高野に依頼したのは正巳を通してのことかと推測する向きもあるが、正巳が専修大学に奉職するようになったのは昭和五年、校歌制定の五年も先のことである。そのように考えるならば、専修大学が高野に作詞を依頼したのは、これまでの校歌作詞家としての高野の実績と東京音楽学校教授という肩書きが大きかったのではないかと思われる。

いずれにせよ、専修大学校歌は高野が手掛けた唯一の私立大学校歌であつた。

6. 専修大学校歌の作詞課程

ここでは、専修大学校歌の歌詞はどのような過程を経て作り上げられていったのかを専修大学に残る鶴岡伊作宛の書簡から見ていくことにしよう。書簡の宛先は作詞を依頼していた高野辰之。鶴岡はこの当時、専修大学の理事を務めていた。ちなみにこの書簡は高野正巳が昭和六〇年に専修大学に寄贈したものである。

鶴岡の略歴を簡単に記す。明治二年（一八六九）、岡山県で生まれた鶴岡は、明治二七年に専修学校理財科を卒業し、東洋経済新報社、銀行集会所勤務を経て、専修大学幹事、その後理事を務めた人物である。専修大学創立者の一人である田尻稻次郎の教え子として、田尻の伝記『北雷田尻先生伝』¹⁶の編纂委員も務めている。その鶴岡が高野に宛てた書簡の全文は左の通りである。

拝復、校歌の件御多忙中にも拘らず、種々御推敲被下、御蔭を以て立派なるもの出来致し難有奉存候、本夕ニモ講師の御目に掛け候処、「宮城の北」ハ「九段の東」としたる方、一層学校の地点を明瞭ならしむる利益ありとの批評有之、又枢区は矢張最初御考案被下候通り、枢地としたる方宜敷哉に愚考仕候、何れにも御一考の上、可然御決定被下度奉願候、尚右御決定の上は直ちに御申越の通り、島崎先生に作曲御依頼被下度候、次に応援歌の方も学生中頻りに其作成を希望致居候ニ付、可成同時に御作成被下候ハ、幸甚之至ニ奉存候、尚応援歌ハ外部

への宣伝を一部の目的と致候故、其歌詞中に専修の校名を加へ
度旨、学生の希望に有之候間、是亦可然御含之上、御起草奉願
候、草々敬具

十月六日

高野先生 侍史

鶴岡伊作

書簡の日付は大正一四年（一九二五）一〇月六日。前述した報告書に「大正十四年九月中作歌ヲ文学博士高野辰之」に依頼したとあるが、まさにそれを裏付ける書簡である。

その内容は、「宮城の北」という文言は「九段の東」とした方が学校の場所がよりはっきりとわかるので良いのではないか。「枢区」は「枢地」とした方が良いのではないか。また学生が応援歌を作つて欲しいと熱望しているので、同時に応援歌も作つて欲しい。しかも応援歌は、外部への宣伝も目的の一つとしているため、歌詞に校名を入れて欲しいという要望を学生が出している。以上を踏まえて作詞をして欲しいというものである。

つまり、専修大学はこの時、儀式用と応援用の二つの校歌を制定しようとしていたこと。応援歌については学校当局ではなく学生が欲しがっていること。そして高野に対しては作詞内容を具体的に指示していたことがわかる。

校歌制定に先立つ大正一三年、専修大学が学生に対して懸賞金を

付けて校歌の募集を行っていたことは先に述べた。当時校舎があつた場所である「今川小路」という地名を歌詞に入れることを条件として挙げていたが、この書簡の内容を見ても、専修大学は校歌の歌詞に校地を具体的に、誰にでもわかるように取り入れることを何よりも気にしていたことをよく示している。

さらに書簡には二種類の高野自筆の専修大学校歌の歌詞が添えられている。一つは「専修大学校歌」と題された原稿用紙（史料1）、もう一つは「専修大学校歌案」と題された原稿用紙に鶴岡が朱筆を入れたもの（史料2）である。作詞の制作過程がわかる資料なので、重複を厭わず、二種類とも掲載する。

（史料1）

専修大学校歌

一 宮城の北 枢区に立ちて

（付札）九段の東 枢地に立ちてトシテハ如何

礎固し 我等が大学

眞実は姿 眞摯は心

学徒幾千 理想に生きて

（数千よりも幾千の方作曲上利便多かるべし）

済世の道 こゝに学び

経綸の策 こゝに究む

二 蒼鷹の羽 両手に開き

世に魁^よけし 我等^{われら}が大学^{だいがく}
剛健^{こうけん}の意氣^{いき}に 力行^{りよくかう}の勇^{ゆう}に
学徒^{がくと}幾千^{いくせん} 希望^{きぼう}に生きて
常久^{とこは}の富^{とみ} こゝに萌^もし
限^{かぎり}なき幸^{さち} こゝに芽^めぐむ
我等^{われら}が行^ゆく道^{みち} 盤石^{ばんじやく}なせり
我等^{われら}が行^ゆく手^ては 光^{ひかり}に充^みてり

この史料1には鶴岡が書いたと思われる付札があり、冒頭の歌詞「宮城の北 枢区に立ちて」を「九段の東 枢地に立ちて」と変更してみてはどうかと高野に対して提案している。

そのほか高野から鶴岡に「学徒幾千」という文言を選んだ理由として「数千」という言葉よりも「幾千」の方が作曲上都合が良いという理由を述べている箇所がある。これは鶴岡が「数千」の方が良いと言ったからだと思われる。

(史料2)

専修大学校歌案 高野辰之作

一 宮城の北枢^{(本)区}地に立ちて

(朱) 矢張区としては如何
礎固^{いしずゑ}し専修大学^{(朱)我等が}

眞実は姿 眞摯は心

二

学徒^{(本)三千} 理想に生きて
(朱) 数と改めては如何、三と限定しては他は学生数三千を超過したる場合に不都合あるへし

濟世の道 こゝに究^{(本)め}
経綸^{さく}の策 こゝに劃^{はか}る^{(朱)究む}

(朱) 次の歌詞を改めたる関係上究めを学び、劃るを究むと改めては如何

蒼鷹^{あそたか}の羽^{はね} 両手^{もうて}に開き (校旗)

世に魁^よけし 我等^{われら}が大学 (御差支なくば専修大学としし)

(朱) 専修大学として差支なきやうに思ふ、尤も校歌の中に校名を入れたるもの他に類例なき由耳にしたり、果して然るは全部我等が大学としたる方宜しくはなきや、御一考を請ふ

剛健の意氣に 力行の勇に

学徒^{(本)三千} 希望に生きて

常久^{とこは}の富 こゝに学^{(本)び}

限^{かぎり}なき幸^{さち} こゝに悟^{(本)る}

(朱) 印の文字は今少しく適切なる文字はなきや、或は

学びを図りと悟るを求むと改めては如何

我等^{われら}が行^ゆく道 盤石^{ばんじやく}なせり
我等^{われら}が行^ゆく手^ては 光^{ひかり}に充^みてり

この史料2「専修大学校歌案」の朱筆の部分はすべて鶴岡の手によるもので、歌詞および歌詞の後の○内の文字は高野の手によるものである。鶴岡の朱筆で「矢張区としては如何」という鶴岡の文言を見ると、この二人のやり取りは少なくともこれ以前に一度はあったと考えることができ、「史料1」「史料2」という順番でやり取りがなされたと思われる。

鶴岡による歌詞の校正は微に入り細にわたる。特に冒頭にはかなり気を使っている。この部分に早稲田も明治も学校の場所を組み込んでいるが、専修大学、そして高野も同様の手法を採ろうとしていることがわかる。

もう一点、二人が何度も推敲を重ねている箇所が校名である。高野は歌詞に校名を組み込もうとしていたのに対して、鶴岡は「校歌の中に校名を入れたるものハ他に類例なき由耳にしたり」と述べているが、前述したように、早稲田大学も明治大学も校名を入れている。この点に関しては、鶴岡はこうした他大学の事例を知らなかったようであるが、多くの校歌を手掛けてきた高野はもちろん他大学の校歌の特徴をつかんでいたのだろう。

この二人のやり取りからは、この時期の大学校歌の歌詞に何を求めているかを知ることができる。そして早稲田大学の校歌の手法は専修大学でも取り入れられていることがわかるのである。

7. 専修大学校歌の歌詞の意図

高野が鶴岡とのやり取りを経て書き上げた専修大学校歌の歌詞にはどのような意味が込められているのか。ここではそれを見ていくことにする。前述の通り、大正一五年（一九二六）一月、儀式用と応援用の二曲がようやく制定されたわけであるが、それぞれの校歌の歌詞は次の通りである。

儀式用

一、宮城きやうじょうの北 枢地すうちに立ちて 礎固し 我等が大学

質実しじつは姿 真摯しんしは心 学徒幾千 理想に生きて

濟世しせいの道 ここに学び 経綸けいりんの策 ここに究む

二、鳳の翼 両手に開き 世に魁りきけし 我等が大学

剛健こうけんの意氣に 力行りきやうの勇に 学徒幾千 希望に生きて

常久の富 ここに萌し 限りなき幸 ここに芽ぐむ

我等が行く道 磐石ばんせきなせり

我等が行く手は 光に充てり

応援用

一、九段の台下 枢区に立ちて 健兒我等に 希望を理智を

育む学舎よ 歴史は古く 培ふ学舎よ 礎固し

おう専修 おう専修 専修大学

二、東亜の空に 明星なして 立つる経綸 施す策を

輝かしむべき 務は重く 仰がしむべき 行手を遠し
おう健児 おう健児 いざ立てよ健児

まず儀式用を見ていこう。最初の言葉「宮城」とは皇居を指す。

徳川幕府の居城（江戸城）が明治元年（一八六八）に天皇の住まいとなり、明治二一年以降、宮城と称されるようになったが、昭和二三年に宮城の名称が廃止され、皇居と呼ばれるようになる。大学の校歌が作られたのは大正一五年であつたため宮城という言葉が使われている。

当時の専修大学も今と同じ場所にあつた。東京都の地図を見るとわかるが、専修大学は皇居の北側に位置している。つまり最初の二行は、専修大学は皇居にほど近い場所に位置する盤石な大学であるということゝ謳っている。高野と鶴岡がこだわった箇所である。

続いて本学の校風である「質実剛健」「真摯力行」（現在は「誠実力行」）が一番と二番に分けて歌詞に組み込まれている。この二つの校風を学生全員が理想、もしくは希望として常に抱きながら大学生活を送り、卒業後もその気持ちを持ち続けてもらいたいという願いが込められていると思われる。

一番の最後の二行に「濟世」「経綸」という言葉がある。「濟世」は社会を救うこと、「経綸」は国家を治め整えることを言う。つまり、専修大学の学生は自分のためだけでなく、「濟世」「経綸」を目的として法律や経済を学び、そして究めて欲しいという意味である。

う。法律学と経済学を学ぶ学校として設立された専修大学ならではの歌詞である。

二番の歌詞は「鳳の翼」で始まる。高野は案の段階では「蒼鷹の羽 両手に開き」という言葉を使い、校旗のことと書いている。それが最終的には「蒼鷹」から「鳳」に変わっている。

鳳は本学の校章にも見ることができ、鳳が校章に使われたのは、校歌制定のわずか五年前、大正一〇年のことである。「鳳の翼 両手に開き」とはまさに、高野の言う通り校章に見るデザインのことを指していると思われる。そして「世に魁けし」とは創立明治一三年という私学の中でもかなり古い歴史を持つという本学の自負の表れと言えるだろう。

最後の四行に関しては、ある意味、校歌における定型句と言える。文言は違えども、多くの学校の校歌は学校、そして学生諸君の未来は永久の希望に満ちた明るいものであるという意味の言葉を連ねて歌を締めくくっている。

応援用も儀式用の歌詞をほぼ踏襲していると言っても良い。冒頭は「宮城」ではなく「九段」、「枢地」ではなく「枢区」が採用されている。高野の原案は応援用の歌詞に活かされることとなった。そして儀式用と応援用の一番の違いは歌詞に「専修大学」という言葉を入れたことにある。

先に多くの私立学校が早稲田大学校歌の形式を踏襲していると述べたが、専修大学校歌にそれを当てはめると、儀式用では、①学校

の所在地（「宮城の北 樞地に立ちて」）、②建学の精神（「質実は姿 真摯は心」「剛健の意気に 力行の勇に」）は見ることができ、③学校名はない。しかし応援用を合わせて聞くことで、初めて③学校名（おう専修 おう専修 専修大学）を知ることができる。高野は儀式用と応援用を対の歌として作詞したと考えられる。

おそらく鶴岡は、儀式用は入学式や卒業式など専修大学関係者のみが集まる場所で使用されるために、校名を入れる必要性がないと判断したのではないだろうか。しかし応援用は専修大学という学校を知らない人々が集まる場で使用する可能性が高いために学校名を入れた。つまり二つの校歌の用途を考えたうえでの二人の推敲作業であったと思われる。

専修大学において最初の運動部である庭球部の創部は大正九年。その後山岳部、スキー部、馬術部などが相次いで発足した。大正半ばから昭和初期は、欧米から日本にもたらされたボートやスキー、ラグビーといったスポーツが注目を集め始めた時期でもあり、専修大学にもそうした流れが波及していたことを物語っている。

そして前述したように東京六大学野球リーグ戦が始まり、大学スポーツが隆盛期を迎える。専修大学野球部が正式に創部したのはそんな最中の大正一四年のことであった。

この年、國學院大學、日本大学、東京商科大学（現・一橋大学）、東洋大学、宗教大学（現・大正大学）とともに、東京六大学野球連盟に対抗するように、東京新大学野球連盟を結成、リーグ戦が

開始された。その後、変遷を経て現在の東都大学野球リーグが始まったのは昭和六年（一九三一）。当時の学内新聞には野球部の活躍とともに在校生へ応援を呼び掛ける記事が掲載されている。

高野はこうした対抗戦の応援を目的とした校歌を別の学校のためにも作っている。専修大学校歌と同じ年に作った静岡高等学校（現・静岡大学）の応援歌である。一番だけその歌詞を紹介しよう。

ラ、ラ、ラ、ラ、起てよ選手 腕さすり起てよ
打てくくくよ打てよ選手 寄せ来る敵打てよ
鍛へし腕、練りたる胆 試むべき今日ぞ
起てよ、打てよ、打てよ 力を示せ静岡

ごらんの通り、まさに野球対抗戦の際に歌うための応援歌である。それもそのはず、この歌は静岡高等学校が浦和高等学校との試合のために応援歌の制作を依頼したものである。当時、静岡高等学校の教員であった塚原政次から高野に宛てた書簡¹⁷が残っている。左の通りである。

拝啓、初夏之節、貴兄益御壮栄に御座候趣奉大賀候、又先達ハ文学博士の学位御受け相成候由、慶賀之至り御座候、陳々乍突然此手紙持参の学生ハ、当校学生佐原善文、濱野三郎の両人に有之候が、来月下旬浦和高等学校と野球の仕合仕候こ

と、相成り候が、浦和の応援歌ハ非常によりしき曲にて、其歌のみにても十分勝利を得候位に有之、当校の従来の歌ハ拙にて残念ゆえ、是非今回新に歌と曲とを得度由申出候につき、貴兄を御紹介仕候処、是非貴兄に御依頼申呉れと申出候へハ御紹介仕候ゆえ、御多忙中誠に恐縮に御座候らへども、兩人に御面会被下様、しかく御聴取被下度候、又歌と曲と共に御礼ハ生徒共の計画致候事ゆえ、御談にならぬ程度に御座候ゆえ、歌も又曲も歌も又曲も貴兄より適当な人（研究院生位にてよろしからむか）へ御依頼被下度候

先ハ右御伺旁御依頼也、如此御座候、敬具

六月十日

塚原政次

高野博士 玉案下

この書簡からわかることは、静岡高等学校は浦和高等学校との野球対抗戦を来月に控えており、その対抗戦で使用するために応援歌を作ろうとしていたことである。浦和高等学校の応援歌があまりに優れているのに対して、従来の静岡高等学校の応援歌では応援合戦の際に対抗できないと学生たちが考えていたためであった。いかに学生たちが対抗戦の応援を重要視していたかがわかるだろう。

数多くの学校の校歌や応援歌を手掛けた高野にとって、対抗戦を意識して校歌を制定する学校側や生徒側の気持ちは十分わかっていないに違いない。専修大学校歌にしても、静岡高等学校校歌にしてもそ

うした依頼主の要求を理解したうえで作詞したと考えられる。このような点も校歌の作詞依頼が高野に殺到した理由の一つであろう。

高野がどのように考えながら校歌を作詞したのかを示す資料が残っている。「飯山高等女学校の校歌に就いて」と題されたメモである。これは昭和四年、前述した飯山高等女学校（現・長野県飯山高等学校）の校歌を作詞した際に書かれたもので、このメモを見ると、高野がいかに真剣に校歌制作に取り組んでいたかを知ることができる。

高野は「校歌の必要」として「鼓舞 箴戒 誘導」を挙げている。鼓舞とは大いに励まし気持ちを奮い立たせること。箴戒とは良くない点を注意し戒めること。誘導とは誘い導くこと。この三つの言葉はまさしく校歌の効用を表している。

そのほか、歌詞を七五調にする理由として作曲しやすく、親しみやすい曲調になりやすい、生徒を中心にすえた歌詞を作るのが自分の流儀であるなど、歌詞作成にまつわる自らに課した種々の約束事はいくつも記されている。校歌の歌詞といえども片手間にしない高野の仕事ぶりの一端を垣間見ることができよう。だからこそ全国の学校が高野に仕事を依頼したと思われる。

さらに専修大学の例を見てもわかるように、高野は依頼校の意見を充分にくみ取りつつ歌詞を作成している。そこにも高野の柔軟性を見ることがができる。文部省唱歌の作詞は、多くの編纂委員の意見を調整し、かつ文部省の意向も組みつつ作成する必要性があっ

た。この点で「朧月夜」や「故郷」の作詞を高野のみの仕事とすべきでないという意見もあるが、実はこうした調整能力こそが高野の作詞を支えていたのではないだろうか。

専修大学校歌の作曲者である信時潔（一八八七・一九六五）についても触れておく。今ではその名前を知るものはそれほど多くはないが、存命中の信時は、「赤とんぼ」や「待ちぼうけ」などの童謡で有名な山田耕筰と並び称されるほど、大正・昭和前期にかけて一世を風靡した作曲家であった。合唱曲・交響曲・唱歌など様々なジャンルで数多くの名曲を生み出したほか、東京音楽学校（現・東京藝術大学）の教員として、優れた音楽家を世に出している。

信時が人気作家であったことを示す一つの例として一〇〇〇曲以上の校歌や社歌、自治体歌を手掛けていることが挙げられる。特に高野と信時の二人が組んで制作した団体歌は非常に多い。専修大学校歌のほか、先に挙げた静岡高等学校の校歌もそうである。

実は当初、専修大学校歌の作曲は信時ではなく、別の作曲家に依頼する予定であった。鶴岡と高野の書簡によると、高野は作曲家として島崎赤太郎を念頭に置いていたようである。

島崎は当時、東京音楽学校教授として、作曲家・オルガン奏者として活躍するほか、信時や唱歌「故郷」の作曲で有名な岡野貞一など多くの後進を育成した人物でもあった。さらに高野とともに文部省唱歌編纂にも携わっており、そのため高野は島崎に作曲を依頼しようとしていたのかも知れない。

信時の名を世に知らしめた曲の一つに「海ゆかば」がある。昭和一二年に作曲されたこの曲は、戦時中、国家儀式に使用され「第二国歌」と位置づけられたほどであるが、信時自身はこのことを恥じ、戦後は積極的な作曲活動を行わなかったとも言われている。そのことも信時の名前が忘れられていく要因の一つになったとも言える。しかし信時が遺した数々の名曲は今なお、その輝きを失うことなく、本学をはじめ、多くの人々に歌い継がれているのである。

おわりに

関東大震災による甚大な被害、大学昇格の遅れ、創立者たちの相次ぐ逝去、財政難など、大正期の専修大学を取り巻く状況は非常に厳しいものであった。こうした状況を打破すべく、学生や教職員や卒業生の心を一つにするための様々な施策を大学当局は打ち出す。校旗や校章の制定などがそうである。そして校歌の制定もその一環と言えよう。校歌を制定することで専修大学を全員一丸となつて盛り上げていこう。そのような気持ちであったと思われる。

さらにこの時期、大学当局にとっては、宣伝を必要とする非常に重要な出来事が控えていた。念願であった法学部の再興である。私立法律専門学校としてスタートした専修大学にとって、明治二四年度に法律科の生徒募集を停止して以降、この問題は長年の懸案であった。

そのほかにも、新校舎の竣工、大学部に三年制の予科を、専門部

には新たな学科を設置し、学生定員を増員するなど積極的な拡張政策を大学当局は進めていく。その背景には関東大震災以降の債務累積による経営の悪化を、学生数を増やすことで何とかしたいという大学側の思惑があったのである。

そのためには、まずは専修大学の名前をできるだけ多くの人々に知ってもらう必要がどうしてもあった。校歌はそのための宣伝材料の一つでもあった。だからこそ鶴岡は学校所在地の文言にこだわった。そして高野の原案「学徒三千」という言葉に対して、「数と改めては如何、三と限定しては他は学生数三千を超過したる場合に不都合あるへし」と注文をつけた。この注文に学生数を増員を願う鶴岡の気持ちが表れている。校歌に期待する経営陣に思いを見ることができらう。私立大学にとって校歌は単なる歌ではなかったのである。

最後に専修大学校歌のその後に触れて本稿を終える。紆余曲折の末、できあがった専修大学の二つの校歌であるが、儀式用は今なお歌い継がれ、平成元年に開学した石巻専修大学も同校歌を継承していることは最初に述べた。しかし応援用はわずか五年ほどでその役目を終えることとなる。『専修大学新聞 第八三号』（昭和六年二月二十日発行）には「若人の血をそゝる 新エール発表さる 山田耕作氏作詞作曲で学園に漲る新エールの響き」という見出しの記事が掲載されている。

今までの本学応援歌に対し学生の不満ありたる為め、学生会を中心として全学生が一段に成つて新応援歌作成に力を注いで居たが、兼て楽界の權威山田耕作氏に依頼してあつた同氏作詞作曲なる新エールが出来上がつて来た。

左に示すが如く同エールは本学モットーたる質実剛健の意気と全学生の團結せる熱と力を標象し、その曲も歌詞同様吾々の熱ゆるが如き意気を示して居る事故、全学生の期待に沿ふ事であらう。

この記事にあるように高野と信時が作った校歌のうち、少なくとも応援用に関しては、学生の評判は芳しくなかったようである。山田耕作の手による新応援歌の歌詞は次の通りである。

しら／＼と昇る朝日に 我等はめざす緑の栄冠

見よ若人の血は躍る

打てこの意気この力 我に無限の勢あり

専修々々其名ぞ我等が専修

この新応援歌はその後、「緑の栄冠」というタイトルが付けられ、現在、専修大学ラグビー部の部歌として使用されている。しかしこの新応援歌も昭和十三年（一九三八）に新たな応援歌「勝てよ専大」に取って代わられることになる。

専修大学をはじめ、いくつもの応援歌を持っている学校は多い。

学校によっては第二校歌とも称されるこの種の歌は、儀式用と違い、その時代時代の世風を表す言葉や曲調を用いることが多いためか、使用期間が短いことがある。何より応援歌には大学当局よりも学生の意志が反映されることが多く、学生たちの手によっていくつもの応援歌が生み出されていくのである。

新応援歌を見るとわかるように、高野が作った歌詞よりも選手たちを鼓舞する要素が強いと思われるが、それほど大きな違いがあるわけではない。応援歌の場合は歌詞の良し悪しが問題ではなく、学生が気に入るかどうかが大きな問題であった。東京音楽学校教授という権威を持つ高野より、在野で気を吐く山田の方が学生からは好まれたとも考えられる。

本稿では私立大学にとって校歌とはどのような意味を持っていたのかということ、高野辰之が作詞した専修大学校歌を事例として考察した。大正末期から昭和初期の専修大学の経営政策や学生の動向、大学スポーツの隆盛に深い関わりを持っていたと結論づけた。

しかし今回、取り上げなかった寮歌を抜きにして大学校歌の意義をすべて語ることはできない。特に帝国大学や旧制高校には数多くの寮歌が残されており、私立大学とはまた違う観点からの考察が必要となるだろう。今後の課題としたい。

また高野辰之が残した校歌を含む団体歌は一〇〇曲を優に超える。そのうちの多くは東京と長野の学校で、かつ小学校や中学校で

ある。女学校の校歌も多い。本稿で取り上げた専修大学校歌は、高野が残した唯一の大学校歌であり、その意味では希有な例である。

そこから校歌作歌・高野の特質を見ることはできないのではないかという意見もあるだろう。この点についても今後、高野が作詞した校歌の比較分析を行うことでその責めを果たしたいと思っている。

(註)

1 高野の業績を多面的な視点として取り上げたものとしては、高野辰之のご子孫にあたる芳賀綾氏が監修した『定本 高野辰之・その生涯と全業績・』（郷土出版社 二〇〇二）がある。そのほか高野伝記に類するものとして、三田英彬『葉の花畑に入り日うすれ・童謡詩人としての高野辰之・』（理論社 二〇〇二）、畑守人『物語高野辰之』（鬼灯書籍 二〇〇二）、野沢温泉村斑山文庫収集委員会編『志をはたして 高野辰之 その学問と人間像』（野沢温泉村おぼろ月夜の館 一九八九）など数多くの書籍が刊行されている。また大正大学が没後五十年を記念して開催したシンポジウムを記録した『高野辰之の世界・没後五十年記念・』（大正大学 一九九七）、そのほか生前の高野を知る人々が高野の業績や人となりを記している「特集 高野辰之の人と業績」（『信濃教育 第一一六四号』一九八三）といったものもある。

2 岩井正浩『子どもの歌の文化史』（第一書房 一九九八）

3 鈴木治「文部省唱歌成立の一断面」（日本音楽教育学会編『音楽

- 教育学研究Ⅰ「音楽教育の理論研究」音楽之友社 二〇〇〇年)、「日の丸の旗」歌詞成立考」(『音楽教育史研究 第一〇号』音楽教育史学会 二〇〇七年) など
- 4 武井和人「古典籍学者としての高野辰之」(『日本歌謡研究 第四五号』日本歌謡学会 二〇〇五年)
- 5 権藤敦子「高野辰之と明治・大正期の演歌・『日本歌謡史』における位置づけを中心に」(『広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部 第六一号』広島大学大学院教育学研究科 二〇一二年)、「高野辰之と日本音楽・国文学と唱歌の間で」(『広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部 第五五号』広島大学大学院教育学研究科 二〇〇六年)、「高野辰之と俚謡収集・その背景をめぐって」(『広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部 第五九号』広島大学大学院教育学研究科 二〇一〇年)、「高野辰之と東京音楽学校・邦楽調査掛を中心に」(『音楽教育ジャーナル 第三五号』東京下術大学音楽教育学研究会 二〇一一年) など
- 6 市川包雄「長野県における校歌の制定・浅井洌・高野辰之作詞校歌を中心に」(『長野県立歴史館研究紀要 第一〇号』長野県立歴史館 二〇〇四)
- 7 『広辞苑 第三版』(岩波書店 一九八三)
- 8 浅見雅子、北村眞一『校歌 心の原風景』(学文社 一九九六)
- 9 水崎富実「近代日本の「学校教育の内容」・校歌をめぐる「音韻」を通しての「国語」の統一」(『東京大学大学院教育学研究

- 科紀要 第三九号』二〇〇〇)
- 10 東忠尚『学生歌とその時代・寮歌・校歌・応援歌の物語』(新風舎 二〇〇六)
- 11 檜皮瑞樹「早稲田大学校歌」の石碑」(『早稲田ウィークリー 第一二四九号』(早稲田大学学生部 二〇一一年)
- 12 東忠尚「前掲書」
- 13 『大正十四年度^{昭和十四年四月} 第四十六学年報告書 附第四十七学年収支予算』(専修大学大学史資料課所蔵)
- 14 週刊朝日編『続・値段の明治大正昭和風俗史』(朝日新聞社 一九八二)
- 15 畑守人『物語高野辰之』(鬼灯書籍 二〇〇二)
- 16 田尻先生伝記及遺稿編集会編『北雷田尻先生伝』上下巻(田尻先生伝記及遺稿編集会 一九三三)
- 17 おぼろ月夜の館・斑山文庫・所蔵
- 18 おぼろ月夜の館・斑山文庫・所蔵
- (追記) 文中で紹介した芳賀綏氏には本展示を記念して開催したシンポジウムにおいて、ビデオ出演という形で高野辰之やその妻・つる枝の人となりをお話いただいた。次に掲載する「文学博士・高野辰之の人柄と学風について」はその講演の記録である。